

## V 資料紹介

### 高槻城跡出土の将棋駒

鐘ヶ江 一朗

平成元年10月から平成2年3月まで、近世高槻城の三ノ丸北郭の一部を調査した。調査地は武家屋敷地と推定される地域で、調査面積は約2,500m<sup>2</sup>である。近～現代の大規模な攪乱によって、近世の遺構面は削平されていたが、12～19世紀にかけての井戸61基や多数の柱穴・溝を検出した。

ここで取り上げる将棋の駒は、調査地南西部の井戸41一括遺物の一部である。近世に属する将棋駒の出土例は比較的少ないなかで、ふつうの将棋の駒とともに「中将棋」とみられる駒が含まれており、今回紹介することにした。

「中将棋」は、盤面12×12、駒数92枚を使う将棋の一種である。14世紀ごろから行われ、江戸時代にも愛好されたものの、ルールが複雑で勝負に時間がかかりすぎるためいまではほとんど行われていない。これをさらに発展させたものが「大将棋」で、駒数130枚を使うとされる。中将棋と共に通する駒が多く、今回出土例ではいずれとも決めかねるが、大将棋は実際に指されていたかどうか疑わしいといわれている。そのため以下では「中将棋」、及びそれと区別するため盤面9×9、駒数40枚の将棋（現在の将棋と同じ）を「小将棋」として記述する。

#### 〔出土遺構〕

井戸41は、不整円形の掘形に直径約0.8mの桶状の井戸枠を納めたと考えられる井戸で、深さ約0.75mをはかる。井戸枠を抜いてから埋め戻しており、出土品は埋め戻しのときに投入されたらしく埋土の層位は分別できない。なお掘形埋土には全く遺物を検出しなかった。

遺物は、底に近い方に木製品（木箱、付札、刀鞘・柄、駒など）や金モール・土師皿・中位に棧瓦片、中～上位で土師皿・陶磁器類をまとめて検出している。出土陶磁は肥前陶磁IV期にあてられ、この井戸の廃絶はおおむね18世紀末～19世紀初め頃と思われる。

#### 〔中将棋の駒〕（図1・図版第8）

21枚出土した。幅1.2～1.5cm、厚さ0.3cmほどの柾目の薄板から、高さ1.5～2cmの

五角形を刃物で切り出し、墨書をほどこしてある。当初は携帯用の小形駒かと思っていたところ、「奔猪」や「獅子」の存在から中将棋の駒とわかったものである。表1に中将棋の駒の並べ方と駒の成り方を示した。

判読・特定できた駒は、歩兵〔と〕4、横行〔奔猪〕1、豎行〔飛牛〕1、飛車〔龍王〕1、麒麟〔師子=獅子〕1、銀将〔豎行〕1の9枚、ほかに王将かと思われる1枚がある。各駒には朱線で動かし方が記されており、その痕跡が認められるものがある（注）。

これらは寸法・形ともに不揃いで、いかにも手づくりを思わせる。素材については、一見してスギ材と判断されるものとそうでないものの2種がある。駒の種類によって材や大きさを揃えるようなことはしていないが、墨書の字体や筆運びはいずれもよく似ており、同一人の手によるものと考えられる。

#### 〔小将棋の駒〕（図2・図版第9）

26枚出土した。駒の種類や大きさ、形などいまとほとんど変わらぬものが出土している。これらは1と2を除き、すべて字を彫り込み、そこに墨（14のみ朱）を入れたものであって、描駒（1・2）と彫駒（3～26）に分けることができる。

（描駒）2点とも歩兵である。1は両面とも彫り込まずに漆で描いたもの、2は表面が彫り込み、裏面が漆描きである。この2つは高さに比べて幅が狭い点でも、他の彫駒とは趣が違っている。

No.	名 称	高さ	幅	厚さ	備 考
1	（歩兵）	1.4	1.2	0.2	裏面・と
2	（”）	1.5	1.2	0.2	”
3	歩兵	1.8	1.3	0.2	”
4	（”）	1.8	1.4	0.2	”
5	（横行）	2.0	1.4	0.3	奔猪
6	（豎行）	1.7	1.2	0.2	飛牛
7	飛車	1.8	1.4	0.2	龍王
8	麒麟	2.1	1.4	0.2	師子
9	銀将	1.6	1.4	0.2	（豎行）
10	王将？	1.9	1.5	0.3	朱点遺存
11	不 明	1.7	1.3	0.3	”
12	”	1.7	1.3	0.2	”
13	”	1.9	1.5	0.2	”
14	”	2.1	1.3	0.2	”
15	”	1.7	1.5	0.3	
16	”	1.8	1.5	0.3	
17	”	2.0	1.3	0.2	
18	”	1.9	1.4	0.3	
19	”	2.0	1.5	0.3	
20	”	2.0	1.5	0.2	
21	”	2.2	1.5	0.3	

表2 中将棋の駒一覧（単位cm）

No.	名 称	高さ	底 幅	厚さ	備 考
1	歩 兵	2.6	1.7	0.8	漆の描駒
2	”	2.8	*1.7	0.7	”、表は彫込
3	”	*2.5	2.1	0.8	彫込後、墨入
4	”	2.6	2.0	0.8	（以下同じ）
5	”	2.5	2.1	0.9	
6	”	2.6	2.1	0.8	
7	”	2.7	2.2	0.9	
8	”	2.8	*2.1	0.9	
9	”	2.7	*2.2	1.0	
10	飛 車	3.1	*2.6	1.0	
11	”	3.0	2.7	1.1	
12	角 行	3.0	2.8	1.2	
13	”	3.1	2.7	1.1	
14	香 車	2.9	2.3	1.0	
15	”	2.8	2.2	1.0	
16	桂 馬	2.7	2.6	1.0	
17	”	2.7	2.5	0.9	
18	”	2.7	2.7	1.0	
19	”	2.8	2.5	0.9	
20	銀 将	2.9	*2.5	0.9	
21	”	2.7	2.6	0.9	
22	金 将	3.0	*2.4	1.2	
23	”	3.1	2.6	1.2	
24	”	3.1	2.7	1.2	底・側面墨書
25	王 将	3.2	3.0	1.1	王将か
26	”	3.2	3.0	1.1	

表3 小将棋の駒一覧（単位cm、\*は現存長）

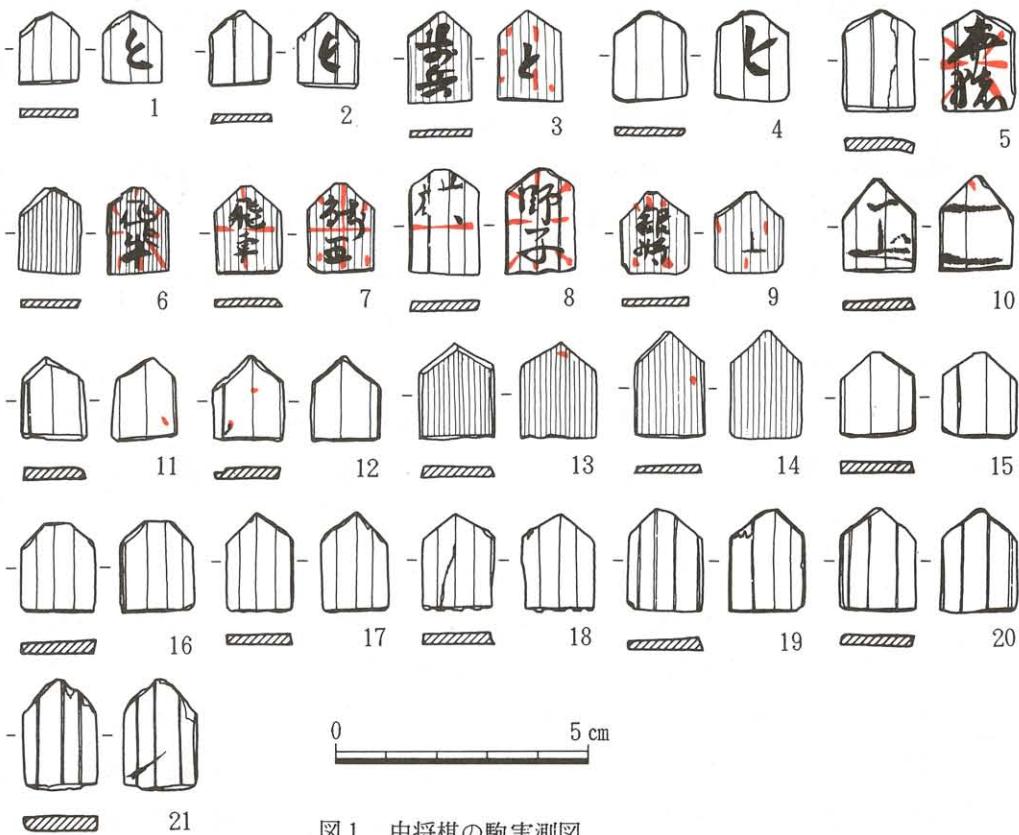


図1. 中将棋の駒実測図

		仲人		仲人		歩兵																
歩兵																						
横行	豎行	飛車	龍馬	龍王	獅子	奔王	龍王	龍馬	飛車	豎行	横行	飛車	龍王	角行	飛車	龍王	角行	飛車	龍馬	角行	飛鷲	
反車		角行		盲虎	麒麟	鳳凰	盲虎		角行		反車		龍王		角行	龍馬	角行	龍馬	角行	飛鷲	角行	×
香車	猛豹	銅将	銀将	金将	王将	醉象	金将	銀将	銅将	猛豹	香車		龍王		王将	×	王将	×	王将	×	王将	×

仲人	↓	醉象		猛豹	↓	角行		反車	↓	鯨鯢		香車	↓	白駒		豎行	↓	飛牛		横行	↓	飛猪		歩兵	↓	金将		横行	↓	飛猪		歩兵	↓	金将		豎行	↓	飛鹿		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	豎行		銅將	↓	横行		仲人	↓	醉象		猛豹	↓	角行	
銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	豎行		銅將	↓	横行		仲人	↓	醉象		猛豹	↓	角行																					
金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	豎行		銅將	↓	横行		仲人	↓	醉象		猛豹	↓	角行																	
銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	豎行		銅將	↓	横行		仲人	↓	醉象		猛豹	↓	角行																	
金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	飛車		金將	↓	飛車		銀將	↓	豎行		銅將	↓	横行		仲人	↓	醉象		猛豹	↓	角行																	

表1 中将棋駒の並べ方（左）と成駒（右）



図2. 小将棋の駒実測図

(彫 駒) 8種24点ある。その内訳と各部の寸法を表3に示した。駒の種類ごとに比較的よくまとまった数値を示し、さきに紹介した中将棋の駒とは対照的といえる。しかし書体はさまざまであって、たとえば香車や金将にみられるように、同じ種類の駒でも彫り手または書き手が違うとみられるものが混じっている。また24(金将)には、下面及び左側面に墨書がある。所有者または製作者の符丁と思われる。

駒の素材については未確定であるが、年輪が明らかな6・9・11・16・20・23・25はスギ材と思われる。

これらの駒は、種類や枚数からみておそらく1組で使用されたと思われるが、上記のように材質や書体の異なるものが含まれている。なかでも14と24は、他の駒に比べて書体・彫りともに優れ、摩耗も少なく良好な遺存状況にある。一方、スギ材とみられる一群の木取りは一定しておらず、とくに金将や王将など、裏返す必要のない駒の上面は湾曲している。あるいは桶板材などを再使用した可能性もある。

小将棋の駒にみられるこうしたばらつきを、入手当初からのこととみると、失った駒を手製のもので補って使った結果か、判断する材料を欠く。いずれにせよ、いまの目からみれば不揃いにうつる駒を手に、勝負に熱中する二人の姿が思い描かれる。同時に出土した中将棋の駒は、あるいは彼らの将棋好きが高じた結果、自作したものかもしれない。駒面に記された朱点を頼りに、ああだこうだと時間をつぶす、泰平の世の武士なればこその仕業にみえる。

本稿執筆にあたっては、社団法人将棋博物館の小泉信吾氏にたいへんお世話になりました。この場をかりてお礼申し上げます。

(注) (6)の裏面〔飛牛〕は、駒の動きを示す朱線が八方に引かれている。江戸時代棋を網羅した『象戯図式』では、飛牛の動き方を「上下四角走」と記しており、今回出土品は食い違いをみせている。しかし、赤外写真からは1字目「飛」の墨書が明らかなので、ここでは(6)を堅行〔飛牛〕としておく。

#### 〔参考文献〕

小泉信吾「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』 第1集

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年

水野和雄「将棋の流行」「古代から中世へ」『古代史復元』10

講談社 1990年

増川宏一『将棋 I・II』 法政大学出版局 1977・1986年